

東陽中だより

教育目標 ～明日を拓く～

・豊かな心 ・活きた知性 ・たくましい体

発行責任者 小野寺 憲治
文 責 佐々木 正道

発行日 平成29年8月31日

光庭のカモ達へ

校長 小野寺憲治

本校縁の方に聞きますと早くは十数年前からカモがどこからともなく飛来し、光庭に巣を作り卵を産み、それを孵す営みが続いているそうです。私が赴任した一昨年前も同じ営みが行われましたが昨年は何故かありませんでした。その年の秋にグラウンドにカモの死骸があり、もしかすると光庭で卵を産み育てたカモなのかと心配しました。

ところがこの春、2年ぶりにカモが巣作りを始めました。さらに今年は校舎裏手のテニスコートと花畑の境界にももう一羽が卵を産み付けていました。部活動の生徒が通路として使用しているため職員が安全な場所に移動しましたが、親ガモは移動した場所には辿り着けず仕方なく元の場所に戻しました。テニスコートの金網の下で草むらに囲まれているとは言え外敵にやられないとは限りません。動物園に相談したところ、動物園では何もできませんとのことでした。一つの方法として光庭に卵を移すことも考えられますとのアドバイスをいただきましたが、光庭の親ガモが他のカモの卵を育てるかは不明とのことでした。20個以上になる卵を1羽のカモが育てられるとは思えませんでした。ただこの2羽のカモは恐らく本校の光庭で育ったカモだろうとのことでした。帰趨本能がそうさせるとも説明してくださいました。取りあえずプランターで囲み、何か囲いをと検討していた矢先、親ガモもろとも十数個あった卵は跡形もなく消えていました。一方、光庭のカモは11個の卵が孵り、よちよちと母ガモに着いて歩く子ガモには何とも心が癒やされました。登下校時には多くの生徒がカモの群れに見とれていました。ここでも自然の摂理が働くのでしょう。現在6羽となりましたが、この間約3か月、かなり生育し親ガモに近づいています。ただ、羽が生え揃わず、また、四方が壁に囲まれ飛び越すまでには至っていません。この状況で母ガモは既に姿を消しましたがこれは子離れなののでしょうか。まだ飛び立つことができないカモ達へ独り立ちしなさいとの思いなののでしょうか。巣作りから現在まで生徒や職員が給餌や簡易プールの水の取り替え、清掃と手をかけてきました。もうじき飛び立つであろうカモ達の成長を見守っています。恐らく自然界では、テニスコート側のカモの様に一羽も孵ることがなく消えてしまうことが自然の摂理なのだと想像できます。その意味から光庭の11分の6羽は奇跡的なカモと言えるでしょう。間もなく羽ばたくカモたちには、しっかりと生き延び来年また飛来できることを生徒達と共に期待するものです。

21日に始業式を行い長丁場の二学期がスタートしました。生徒は3週間後に迫る学校祭の成功に向け準備に余念がありません。また、1学年の「地域交流学習」、2学年の「職場体験学習」が計画されています。本校の子ども達の確かな成長を支えていただいています保護者・地域の皆様方には今後におきましてもご支援・ご協力をお願いいたします。

